

幼稚園から小学校への移行期の母親の適応要因

The adaptation of mothers during their children's school transition
from kindergarten to elementary school in Japan

綾野鈴子、西坂小百合、村上康子、権藤桂子

Suzuko Ayano, Sayuri Nishizaka, Yasuko Murakami, Keiko Gondo

1. はじめに

幼稚園・保育所等から小学校への移行期における児童の適応は、幼小接続や幼小連携などの言葉で代表される重要な検討課題である。これについて考える際、これまでは、児童や幼保小のカリキュラムに働きかけることが中心であった（例えば、アプローチ・カリキュラム、スタート・カリキュラムなど¹⁾）。一方、移行期の児童の適応を左右する背景要因の一つである、親のコンピテンスや親の意識変化などといった「親」についての研究は、後述するいくつかの研究が散見される程度である。

山田・大伴²⁾は、小学校1年生の保護者を対象に就学前後の心配事について質問紙調査を行っており、子どもの友達関係や給食、学習面などにおいて母親の不安が高く、その不安が就学前よりも就学後に高まる傾向にあることを示している。小学校に入学する前の学校生活の様子がわからない不安が、入学後に払拭されるというよりは、むしろ、入学して学校生活が始まるとその不安がより具体的になってくるということであろう。

就学前後の親の期待や不安の意識についての探索的な研究としては、椋田³⁾の、母親を対象とした就学前と就学後の2回にわたる面接調査がある。語りの中から期待と不安の内容を明らかにするとともに、その就学前後での変容について分析している。ここでは、期待や不安の内容として、山田ら⁴⁾も指摘した通り、子ど

もの友達関係や学校生活への適応などのほかに、親同士の関係や教師との関係などについての保護者の期待や不安も示されている。そして、これらの不安の解消に対して、小学校の情報が就学前に得られたのか、就学後に小学校での子どもの様子が情報として得られているのか、あるいは第一子か第二子以降かといったことが影響を及ぼす可能性が示されている。

また、富山⁵⁾ ⁶⁾は、小学校1年生の親を対象とした調査の中で、椋田⁷⁾同様、親の持つ期待や不安には、子どもの適応と親の適応、学校との関係に関するものがあり、第2子以降で不安が軽減されることを指摘している。この研究では、親自身の適応よりも子どもの適応のほうが親の心配事として認識されやすいことが示されているが、親自身の適応と子どもの適応との関係性は示されておらず、親の適応自体の変容過程については言及されていない。ここまでみてきたように、これらの研究で扱われている期待や不安は友達関係や学校生活など「子ども」を取り巻く内容であり、母親と教師との関係や、他の親との関係など、親自身の抱く期待や不安については十分な言及はされていない。親自身が抱く不安は、就学前後の子どもへのかかわりや、幼稚園や小学校での親としての振る舞いと関連することが予想され、子どもが安定して小学校生活に移行していくためには、母親の期待や不安が過度にならないことが必要であると考えられる。いわゆる「幼稚園ママ」から「小学校ママ」への移行は、親自身の発達における重

要なライフイベントであり、それに伴う親意識や親としてのアイデンティティの再構築が行われている時期である。そのため、その移行を円滑にする要因についての研究が必要だと考えられる。

海外に目を転ずれば、OECD⁸⁾が移行(transition)についてまとめた報告においても、小学校への移行における親の役割の重要性が示されている。円滑な移行にとって親子関係の質が影響を及ぼすこと、親自身が子どもの困難などの特徴を理解するのに移行期が重要な時期であることがまとめられている。そのうえで、アイルランド⁹⁾やオーストラリア¹⁰⁾等においては、保護者が子どもの移行を支えるためのツール(情報提供、認識を高める活動など)が開発されているとのことだが、これらもやはり子どもの移行が中心であり、親自身の移行の課題については未だ検討が十分ではないことがわかる。

こうした小学校への移行期の親の期待や不安などの意識を考える際に、Wildgruberら^{11) 12)}は、「個人のレベル」「関係のレベル」「環境のレベル」の3つのレベルに基づいて捉えることが必要であるという理論モデルを構築している。「個人のレベル」は、親自身が小学生の親としての自分をどのように感じているか、子どもの様子に関して親が得られる情報の程度なども含まれる。また「関係性のレベル」とは、教師や学校との関係、子どもと親との関係、「環境のレベル」には、親自身の学校生活への関与が含まれる。このように、親の持つ期待や不安を3つのレベルで構造的に捉えることによって、どのレベルに働きかける必要があるのかがはっきりし、移行期の親を支える効果的なアプローチを考えることができる。

日本ではこのような理論モデルに着目した先行研究は認められないため、まずは母親の語りから、小学校への移行期の子どもを持つ母親自身の期待や不安といった意識を尋ね、就学前後の期待や不安の内容や変容の状況を把握すると

ともに、3つのレベルに沿って分析・考察し、今後の研究のための仮説を見出すことを目的とする。なお、母親の変容を詳細に検討するため、本研究ではいくつかの事例に焦点化し詳細な質的分析を試みる。

2. 方法

(1) 対象者

面接の対象者は小学校1年生の子どもを持つ母親3名である。本調査にさきがけ20xx年2月～3月に、首都圏在住で該当年に子どもが幼稚園から小学校へと進学する母親を対象に予備調査を行った。その際面接調査への協力依頼を行い、それに応じた母親3名に面接を実施した。先行研究(山田ら、富山)において、子どもの出生順位が母親の不安軽減に影響することが示唆されているため、3名の対象者は1年生の子どもがそれぞれ第1子(母親A)、第2子(母親B)、第3子(母親C)であり、子どもの出生順位に偏りがないようにした。

なお、子どもの養育にかかわるのは母親だけではないが、今回の研究では幼稚園児を対象としているため、主たる養育は母親の場合が多いと考え対象者を母親に限定した。

(2) データ収集の方法

面接は20xx年7月に、子どもが通っていた幼稚園あるいは、近隣の地区センター等で実施、1対1の半構造化面接法を用いて行った。面接の総時間数は、それぞれ30分(母親A)、33分(母親B)、34分(母親C)である。

面接内容は、Wildgruberら^{13) 14)}が示した「個人のレベル」「関係のレベル」「環境のレベル」という3つのレベルに基づき構成した。「個人のレベル」としては、「小学校生活を始めた子どもの捉え」、「小学校生活が始まってからの母親の生活の変化」という2点を中心に、「関係のレベル」としては、「教師と母親間における小学校と幼稚園の比較」について尋ねた。さらに、「個人のレベル」「関係のレベル」「環

境のレベル」の3つが相互関連した内容として、「小学校入学前の母親の不安と期待」、「小学校生活入学後の母親の不安と期待」について聞き取りを行った。なお、全ての面接は、対象者の許可を得てICレコーダーで録音を行った。

(3) データ分析方法

分析には、大谷^{15) 16)}が開発した質的データ分析手法のSCAT (Steps for Coding and Theorization)を用いた。SCATは、テキストからの注目すべき語句の抽出、言い換え、概念化を経てストーリーラインを記述する解析手法である。コーディングには①テキスト中の注目すべき語句の記入、②抽出したテキスト中の語句の言い換え、③②を説明するようなテキスト外の概念の記入、④全体の文脈を考慮したテーマ・構成概念の記入、という4つのステップがあり、必要に応じて疑問・課題を記入することになっている。ここでは分析ワークシートの一部を表1に示す。

SCATは、質的研究のためのデータ分析方法として近年多くの研究で用いられるようになった手法であり、その特徴として、小規模なデータでも分析が有効なこと、そして、分析の過程が明示化されることが挙げられる。

分析に当たっては、まず、録音した面接内容をテキストデータに書き起こした。質問に対し、発話者の自発的な発話が続き、途切れるところまでを一発話とした。各母親の発話数は、27(母親A)、36(母親B)、40(母親C)である。発話ごとにIDをつけ、各発話についてコーディングを行った。コーディングは幼児教育についての実践や観察の経験が10年以上の筆者らが行った。それぞれの面接に対して、各2名が独立にコーディングを行い、終了後コーディング内容を検討し合意の上で修正を行った。

3. 倫理的配慮

面接対象者には予め調査の趣旨や目的、面接内容を録音することなどについて口頭と文書で説明を行い、合意を得たうえで承諾書に署名を求めた。また、本論文の中では人名・地名を伏せて、調査者や関係者を特定できないようにした。なお、本研究は、共立女子大学研究倫理審査委員会の承認を受けた。

4. 結果と考察

ここでは分析ワークシートを基に、母親3名による語りを分析し示す。それぞれの語りは分析過程で出てきた中心的な話題をトピックごと

表1. 母親への面接の分析例

発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題
母親A	幼稚園は一緒に通っていたので全部見えていた。押りは何があったか先生から全部聞いていたし、話を聞かなくても行ってみれば一目瞭然で、全部わかってしまったもの。今は全部わからない。はじめは子どもより私の方が心配していた。けど、それにももう慣れた。よほどのことがあれば、学校から連絡来るし、最近いいかなと思っているのは、いいことさえ言えばいいじゃないかな。幼稚園のときは子どもにとって知らなかったことも全部知っちゃっていた。全部知られるというのは子どもにとってプラスじゃないのかなと最近思っている。楽しかったことやできたことを私に話してもらえれば、それだけで話せるし、よほどのことがあったら連絡は来るから、子どもにとっては悪くないのかなと最近思っている。	幼稚園は一緒に全部見えていた。全部わかっていて私のほうが心配していた。私のほうが心配しなかった。	子どもとの一体感 子どもの様子がわかる/わからない 子どもが話したくないこと 話したいことへの共感 子どもの気持ちの尊重	母子密着	わからないことへの不安と、 子どもの話から様子を知ることへの転換	
母親B	ほとんどないで、捜索帯離れのと別一人二人連絡先を交換するとか、帰る方向はみなさんばらばらなので、そこまでSNSをしたりメールをしたりはないので、悪いですよね。	ほとんどない 一人二人連絡先を交換 悪い	保護者同士の付き合いは殆どない	帰宅方向が違う	保護者同士の付き合い 依存しない	保護者同士の交流がしやすい雰囲気ではなかったのか？
母親C	二ヶ月くらいは横に座って一緒にやっていたけど、最近自分やったらほうがいいのになって思うので、横にはないけれど近くにいって違うことをしていて、わからないところがあったら聞きに来てました。	二ヶ月 一緒にやっていた 自分やったらほうがいい 近くにいる 聞きに来て	宿題のやらせ方の変化	自立への促し 間接的支援	自立を促す読方略への転換	

にまとめた。その後、全体を通したストーリーラインとそこから導かれる理論記述を示す。

文中の〈数値〉は発話のID、「」は構成概念をよく表している発話をテキストデータから(一部)抽出し、例示したものである。

(1) 母親Aの語りから

1) 子どもの様子が分からなくなることへの不安

<A 1>「幼稚園は一緒に通っていたので全部見えていた。(中略)話を聞かなくても行ってみれば一目瞭然で、全部わかっていたものが今は全部わからない。はじめは子どもより私の方が心配していた。」

<A 2>「楽しかったことだけ聞く。(中略)前は何かがあったのか知りたくて、けっこう質問攻めにしていたけど、(中略)同じ幼稚園から小学校にあがったお母さん友達と情報交換して(中略)いた。」

母子の密着度が高いからか、分離することで子どもの様子がわからないことへの不安感が強くなったことが窺われる<A 1>。しかし、子どもの気持ちを尊重しながら学校の様子を確認し、他者からも情報を得ようとしている<A 2>。

2) 小学校と幼稚園の違い

<A 3>「先生のスタンスも幼稚園と学校って違う。(中略)まったく別物なんだと1学期で分かった感じ。」

<A 4>「あきらめというか、小学校の先生を悪く言うわけではないけど、勉強のプロで、幼稚園は一人ひとりの特性を見てやってくれていたのが、違うものなんだな、」

<A 7>「学校の先生は距離感もあるし、(中略)何をどれくらい話せるのかわからないなという感じがしている。」

母親自身、幼小の違いを感じ、分析している。小学校に対する期待と諦めに揺れながら担任と

の信頼関係について模索している<A 3><A 4>。また、幼稚園の担任との信頼関係のように、両者で子どもを育てるという密着型の教育を望んでいるようにも思われる<A 7>。

3) 子離れの受け入れ

<A11>「これだけ働くお母さんが多い時代に肩身が狭いけど、本当『おかえり』と言うだけのために午前中過ごしている。」

<A13>「やはり朝一人で出ていくというのが私の中では一番大きい変化で、本当知らないところに行き帰ってくるという感じなので、」

<A14>「言葉でやりとりできるというのもまた新しい楽しみかなと思っている。」

<A15>「何かやっけていこうかな、いかないとなというのもあるって、(中略)自分が働くことを考えて意識は変わってきた。(中略)固執していたらいやだろなって思う部分がある。」

子どもと密着した生活から一変したもののどこかで繋がっていたいという思いからか、子どもの帰宅を出迎えたいという気持ちがある<A11><A13>。子どもの成長を期待しながら、子どもとのコミュニケーションを楽しもうとしている<A14>。一方で、社会進出への迷いや焦りを感じており、子離れへの意識が語られている<A15>。

4) 小学生の親になるにあたって(保護者同士の関係)

<A16>「4月は本当に心配だったんだろうなって自分で思って、(中略)学校入る前は、PTAとか保護者会とかどう感じるのかなと思っていた。(中略)最初は緊張したけど今はいろんな人がいて当たり前だからなって、」

<A17>「幼稚園の評判とかけっこう敬遠される。(中略)子どもが楽しくやっていたらいいかって。お母さんたちと顔を合わせる

機会もそんなにないですし、いいかなと思いますけど。]

<A26>「大きいお兄ちゃんお姉ちゃんがいるお母さんにまずは相談する。(中略)先生に行く前になんとかワンクッション置く。」

<A27>「何も相談したいことは特にはないですが、(中略)いつでも連絡帳や今度の個別面談でとおっしゃっていたので、(中略)先生ってやっぱりお忙しいのかなってちょっと思いましたね。」

他の保護者に対する不安や緊張感があったが、時間経過により受け入れている<A16>。しかし、出身園で作られた母親コミュニティに依存している傾向が見られ、そのことも影響してか、新たなコミュニティへの参加を敬遠しているようである<A17>。子どものことについて情報収集や相談する場合、方法や相手を選択している。他者の子育ての様子を見ながら肯定感を得られる相談者を求めていることが考えられる<A26>。加えて担任にかかわることに対してあきらめが示されている<A27>。

これまでの分析から得られた情報を基にストーリーラインを作成する。さらに、ストーリーラインから理論記述を示す。

ストーリーライン

小学校での子どもの様子がわからないことを感じながらも、子どもの報告から小学校での子どもの姿を捉えようと試みている。小学校と幼稚園の相違について認識しながらも、幼稚園への絶大な信頼とそこまでは叶わないと感じる小学校への期待を持っている。子どもの子離れの必要性を自覚しつつ、子どもとのコミュニケーションのあり方を模索している。新たなコミュニティへの参集の必要性を感じているが、他者の目が気になること、自分の自信の無さから

迷いが生じている。

理論記述

- ・小学校での子どもの情報が得られないことへの不安を感じる。
- ・新たなコミュニティへの参入に不安を抱える。
- ・小学校入学に伴い、母親自身の変容が求められる。

(2) 母親Bの語りから

1) 子どもの様子が分からなくなることへの不安

<B 1>「自由に参観できる学校なので、たまに心配なときに参観には行っているんですけど。」

<B 2>「お迎えがないのでその分先生と親の接点とか連絡のやりとりが取れない。(中略)子どもが注意されていることは本当にはないのかとかは気になっている。」

<B 5>「いろいろ生活面に関しても不安、(中略)楽しんでいるからよしとしようか。」

<B 7>「養護の先生、保健の先生(中略)にはけっこう抱きついたりしている。(中略)上の学年のお兄さんお姉さんと接する機会が多いので、そこで甘えたり、自分を出したりはしている。」

子どもの様子がわからないことに対する不安や不満はあるが、普段から自由に子どもの学校の様子を観察することが可能なためか<B 1>、子どもの様子からありのままの姿を受け入れようとしている。また、担任教師との距離感を感じているが、学校の教育方針を理解する姿勢がある<B 2><B 5>。学内で信頼できる環境があると捉え、子ども同士(友達、年上)の關係に着目し子どもの安定度を確認しながら、子どもを信頼し、柔軟な見通しを持とうとしている<B 7>。そこには、第二子という既有経験も関連するものと思われる。そのためか、学校側

に依存せず自ら子どもの様子を把握しようと意識しており、子どもの様子に対する不安は、自己解決しようとしている。

2) 小学生の親になるにあたって (保護者同士の関係)

<B10>「授業参観のときに一人二人連絡先を交換するとか、(中略) SNSをしたりメールをしたりはないので、薄いですよ。」

<B11>「私は学校の中に知り合いがいるし、(中略) 安心感はあると思う (中略) 電車に乗ってきている方は (中略) お便りがたよりなんだろう」

<B12>「みなさんお忙しいんだろうなって、(中略) 一人で考えてます。」

<B33>「これは他の人には話せないよねっていうのはまず夫に。(中略) まあ担任の先生どうなのよっていう話だったら、(中略) 帰る方向が同じお母さんが役員をしているので、その方に (中略) 話はできるんですけど、ちょっとこの子の言動が…という話はまだ、お付き合いもこれから先長いので、(中略) 学校が同じ友達にはしない。」

母親同士の付き合いに依存しないとしながらも、他者の子育ての関与の仕方が気になる等、他者の様子を窺いながら優越感を感じている<B10><B11><B12>。このことから、他者への関心、他者からの圧力があることを垣間見ることが出来る。子どものことについて相談する内容によって、相談相手を選択しており、人間関係のあり方についても言及している<B33>。

3) 子離れの受け入れ

<B13>「自由な時間は増え、(中略) まあゆとりはできた。」

<B14>「上の子が受験の時期に入ってきたので、(中略) 関心がそちらに。」

<B21>「生活面では (中略) 片手離れたかなというはあるけど、学習面とか (中略)

自分でできている、できていないが判断できないものについては、親の目が必要かな？」

<B25>「夫の先輩の仕事を手伝っているときがあって、(中略) まあ多少できないことはあるけど、できないからって私がそこまでやらなくても困ってないんだな、この子って。」

<B26>「夫の目も「家庭に入っているんだから家のことも整頓、子育てもきっちり」って勝手にそう思ってしまったので、ちょっとそういう点からは解放されたのかな。」

子どもの自立に伴い、母親のゆとりがうまれ子離れが始まっている<B13>。また、第一子の中学受験に向け意識の変容が重なったものと思われる<B14>。子どもの自立を客観的、間接的にサポートし、成長を見守ろうとする態度を示していた。また、子どもの成長を生活面と学習面から客観的に見ようとしており、親子相互の成長が見られた<B21>。母親自身社会と繋がることの重要性を感じており、社会とのつながりを持つことで、子どもを信頼し子離れすることへの安心感が更に高まっている<B25>。また、社会経験を持つことにより、家庭での自己の役割の見直しが行われていた<B26>。

これまでの分析から得られた情報を基にストーリーラインを作成する。さらに、ストーリーラインから理論記述を示す。

ストーリーライン

子どもの様子がわからないことへの不安はあるが、小学校生活に適応していることで母親は満足している。子育ての既有経験により、子どもの成長に柔軟な見通しを持って不安を自己解決しようとする意識がある。一方で学校に関しては同調性の抑圧を感じ

ており、他者に合わせることで安定を図ろうとしている。子どもの自立と共に社会との繋がりを持つことで、母親自身の役割に対する意識が変化しゆとりを持ったサポートをしながら母親自身も成長している。

<C19>「一人目二人目のときは自分がほとんど学校に行っていないので、どんな場所かを私がわかっていない。(中略)あのおとき聞いてあげたらよかったなって。(中略)今だからわかる。」

理論記述

- ・ 第一子の移行期のほうが第2子以降の移行期に比べて母親の不安は高い。
- ・ 子どもの安定した適応が母親の安心感に繋がる。
- ・ 学校という場の同調性への圧力が、母親の適応の妨げとなりうる。
- ・ 母親が社会との繋がり（ここでは職業）をもつことで親役割に対する意識が変化する。
- ・ 子どもの成長を見守ることを通して母親は自分自身の成長を確認する。

(3) 母親Cの語りから

1) 子どもの様子が分からなくなることへの不安

<C 1>「兄2人が行っていた学校なのでよく行っていた。(中略)うちは全然平気に入っていると思う。」

<C 5>「たった4～6月の3ヶ月で。(中略)慣れるかってなかなかだと思う。(中略)子どもってすごいわかって改めて思う。」

<C10>「ちょっとでも役員をやって、中を見ておくと、安心して通わせられるというのはある。」

<C13>「お隣さんだから学校探検行ってくるねって、(中略)すると母は不安でも、子どもは知っている学校になるので、(中略)1年生と交流があるみたいで、そういうのは大切だなって。」

<C18>「(中略)一人目のときは行きなさいって、みんな行ってるんだから、(中略)って言えたんだけど、三人目にしてやっと不安なのかなって。」

既有経験の豊富さ、担任との距離の近さ、良好な関係性を持つことで、安心度が高いことが窺われる<C 1>。また、短期間で子どもが、学校生活に適応する姿を見て満足している<C 5>。学校への積極的関与によって得られる安心感があることがわかる<C10>。幼小交流が、子どもの未知の場と人間関係の広がり、子どもの不安感の減少につながる。それが、母親の不安感の減少に繋がると考えられる<C13>。また、第一子を振り返って、親は学校生活を知らないことへの不安、子どもは母親から離れることへの不安等、新しい環境移行への不安が特に第一子が入学する母親に高く<C18>、そうした不安への共感の必要性があることに気付く<C19>。

2) 子離れの受け入れ

<C26>「『お母さん明日から来なくていいよ』って言われてたんだけど、心配でこっそり見ました。」

<C30>「その間に家のことができるので、楽にはなった。(中略)いない間にもうちょっと家のことができるので、ちょっとは楽になりました。」

子離れに関する不安、子どもの自立の受容とそれに伴う寂しさを感じている<C26>。その反面、母親自身が開放感を感じていることがわかる<C30>。

これまでの分析から得られた情報を基にストーリーラインを作成する。さらに、ストーリーラインから理論記述を示す。

ストーリーライン

子育ての既有経験の豊富さ、学校への積極的関与、子ども自身が小学校に対する知識を入学前から持っていることで母親は安心が得られる。さらに、子どもの様子を冷静に見ることで、新しい環境移行への子どもの不安に対して共感の必要性があることに気付いた。また、子離れに対する不安と子どもの自立を受け入れるというアンビバレンツな気持ちが混在する。

合は、小学校での子どもの情報が得られないことに不安を覚える場合も存在することが見られた。また、環境の変化に伴い母親自身の変容が求められる点も見出された。「関係のレベル」では、母親として子どもを小学校生活に適応させることに集中するが、子どもの気持ちに共感することが移行期を支えることに繋がること示された。また、教師や母親同士との距離感を良好に保とうとする意識が働くが、学校という場には周りに合わせなければいけないという「同調性の圧力」を感じてしまうという「環境のレベル」での問題がある。そのことが、周囲との関係性の構築を妨げる要因にもなりうる。その他、「環境のレベル」の仮説として、子ども自身が小学校に対する知識を入学前から持っていることで母親は安心を得ることができるという点が見出された。

理論記述

- ・子育ての既有経験が安心感に繋がる。
- ・教師との良好な関係と、学校への積極的関与が安心感に繋がる。
- ・子ども自身の小学校に対する予備体験・知識が親の不安を軽減させる。
- ・子どもへの共感的かかわりが移行を支える。

ここでは、母親A、B、Cそれぞれの解析により得られた理論記述をWildgruberら^{17) 18)}が捉えた、「個人のレベル」「関係のレベル」「環境のレベル」の3つのレベルに沿って表2に整理し、総合的にまとめてみる。

「個人のレベル」では、母親B、Cのように「子育ての既有経験が安心感に繋がる。」とあるが、その反面、母親Aのように子どもが第一子の場

5. 今後の課題

本研究では、これまであまり研究されてこなかった幼小移行期の子どもをもつ母親の適応に焦点を当てた結果、今後の研究にとって重要な仮説を見出すことができた。すなわち、子どもが安定して小学校生活に移行していくためには、環境の変化に応じて母親自身の変容が求められ、母親と教師との関係や他の親との関係、親子関係の質が影響することが示された。また、

表2. 理論記述の3つのレベルへの分類

	母親 A	母親 B	母親 C
個人のレベル	・小学校での子どもの情報が得られないことに不安を感じる。	・第一子の移行期のほうが第二子以降の移行期に比べて母親の不安は高い。 ・母親が社会との繋がりが(ここでは職業)をもつことで親役割に対する意識が変化する。	・子育ての既有経験が安心感に繋がる。
関係のレベル	・新たなコミュニティへの参入に不安を抱える。	・子どもの成長を見守ることを通して母親は自分自身の成長を確認する。 ・子どもの安定した適応が母親の安心感に繋がる。	・教師との良好な関係と、学校への積極的関与が安心感に繋がる。 ・子どもへの共感的かかわりが移行を支える。
環境のレベル	・小学校入学に伴い、母親自身の変容が求められる。	・学校という場の同調性への圧力が、母親の適応の妨げとなりうる。	・子ども自身の小学校に対する予備体験・知識が母親の不安を軽減させる。

就学前に子どもが小学校見学や交流活動を母親に報告することで安心が得られることが示された。

したがって、今後の課題は、考察でまとめた3つのレベルの仮説に基づいた質問紙を作成し、小学校入学前と入学後の子どもの母親に対して調査研究を実施し、仮説の検証を行うことである。さらに、その結果を足掛かりとして幼小移行期の母親支援方法の開発に着手することである。

本研究の問題点として、対象を幼稚園出身の子どもに限定した点がある。近年、保育所や認定こども園などに子どもを通わせる家庭が増加する中で、今後は、それらの保育施設から小学校への移行期に直面している母親の適応にも視野を広げる必要がある。

また、対象者と面接者が初対面ということもあり、面接では、母親の適応にとって重要な背景要因である家族間のダイナミクスなどの個人要因にまでは踏み込めていない点は否めない。この点については、面接調査よりも間接的に回答の得られる質問紙調査を通して今後明らかにしていく必要がある。

付記

本研究は、JSPS科研費 基盤研究 (C) 課題番号18K02494 (研究代表者 西坂小百合) の助成を受けた。

文献

- 1) 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター. スタートカリキュラムスタートブック. (2015)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_3/064/siryu/attach/1365782.htm, (参照2017-11-27)
- 2) 山田有希子・大伴 潔: 保幼・小接続期における実態と支援のあり方に関する検討 - 保幼 5 歳児担任・小 1 年生担任・保護者の意識からとらえる - 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 61 (2) . 97-108 (2010)
- 3) 椋田善: 幼稚園から小学校の移行期における保護者の子どもへの期待と不安の変容過程 - 入学前と入学後の保護者へのインタビューを通して - 東京大学大学院教育学研究科紀要, 53. 233-245 (2013)
- 4) 前掲2)
- 5) 富山尚子: 小学校への適応に向けて - 小学校1年生の保護者の意識 - 東京成徳大学子ども学部紀要, 3. 9-17 (2014)
- 6) 富山尚子: 小学校と保護者の連携 - 入学直後の保護者の意識 - 東京成徳大学子ども学部紀要, 4. 1-8 (2015)
- 7) 前掲3)
- 8) OECD. Starting Strong V: Transitions from Early Childhood Education and Care to Primary Education. OECD Publishing, Paris. (2017)
- 9) DES, "Literacy and numeracy for learning and life", Department of Education and Skills, Dublin, (2011)
https://www.education.ie/en/Publications/Policy-Reports/lit_num_strategy_full.pdf, (accessed 2017-10-15) .
- 10) NSW Government, The Transition to School: Literature review, Centre for Education Statistics and Evaluation, (2016)
https://www.cese.nsw.gov.au/images/stories/PDF/Transition_to_School_FA_AA_V2.pdf (accessed 2017-10-15) .
- 11) Wildgruber, A., Griebel, W., Niesel, R. & Nagel, B. Parents in their transition towards school. An empirical study in Germany. Paper presented to the 21st EECERA annual Conference in Geneva, Switzerland. (2011)
- 12) Griebel, W., Wildgruber, A., Schuster, A. & Radan, J. Transition to Being Parents of a School-Child: Parental Perspective on

- Coping of Parents and Child Nine Months After School Start. Dockett, S., Griebel, W., Perry, R. (Eds.) Families and Transition to School. Springer International Publishing. 21-36. (2017)
- 13) 前掲 11)
- 14) 前掲 12)
- 15) 大谷尚：4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学),54(2),27-44(2008)
- 16) 大谷尚.: SCAT: Steps for Coding and Theorization -明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法-. 感性工学,10(3),155-160(2011)
- 17) 前掲 11)
- 18) 前掲 12)

謝辞

本研究の実施にあたってご協力いただいた幼稚園と保護者の方々に厚く御礼を申し上げます。